千葉市池田古墳群から出土した縄文時代の遺物

小　林　清　隆

はじめに

平成4年4月から、千葉市から市原市をとおる鉄道である千葉急行線の運行が一部区間で開始された。周知のとおり、この沿線地域には数多くの埋蔵文化財が所在しており、鉄道の建設に際しても、千葉市内で11遺跡、市原市で1遺跡が記録保存の対象となった。これら12遺跡の発掘調査は、当文化財センターが昭和53年度から62年度にわたって実施し、その成果報告については平成3年度までに逐次報告書としてまとめ、5冊目の刊行をもって一応これを終えることができた（註1）。

しかし、発掘によって得られた情報のすべてを報告書に載せることは不可能であるため、各遺跡とも成果を伝えるに必要不可欠な事実記載のみにとどめた部分もある。また、遺構に伴わない覆土中の遺物は分類と集計を行い、一部の実測図や拓本の掲載と、その簡単な記述によって報告にかえたところもある。2冊目から5冊目までの報告書作成に携わってきた筆者としては、取り敢えず発掘報告としてのその責は果たせたと安堵の胸をなでおろしたいところであるが、反省する点が多く、さまざまな批判もあることと思っている。

報告書の補遺

さて、発掘後の調査区は当然のことながら鉄道の建設工事によって削られてしまい、そこに調査当時の面影をみることはできないし、遺構の配置を想像するのもかなり難しい状況となってしまった。一方、現地事務所で保管していた出土遺物については、いつでも手にとってみることが可能であったため、比較したい土器などはそのつど確認することもできた。報告書を刊行してしばらく期間をおいて、目的をもってそのような遺物をみると、報告当時とは違った観点もうまれてきているため、事実記載さえ不足しているのではないか、と思うことがしばしばであった。これは考古学の特性からいってやむを得ないところかもしれないが、それでもなかには何らかの形で、資料の追加紹介を行った方がよいと考えられる遺物も存在し気にかかっていた。ただそうこう思っていても順次報告する遺跡の整理におわれて時は経過し、千葉急行線建設に伴う調査も収束に向かっていった。

平成3年9月末の事務所の撤収を前に、報告が済んだ遺跡の出土遺物を、県立房総風土記の丘に移管する段となり、平成2年の後半からその準備作業を開始した。移管によって一度手元から資料が離れたならば、いよいよ関係者による補遺は難しくなると考え、はじめに多くの掘立柱建物跡が検出されて注目された千葉市大北遺跡の遺物、特に畿内産の暗文を有する土師器を再検討し、実測図の追加と、報告書でたりなかった各個体の写真を本誌に載せることにした。これは当時事業の担当班長であった谷旬氏が引き受けてくれ、『研究連絡誌』第31号に発表した（註2）。

今回は、上述のような経緯と趣旨に基づき、千葉市花輪町の池田古墳群（註3）から出土した、縄文時代の資料の補遺を行うこととした。

池田古墳群の概要

池田古墳群は千葉市の南部に位置し、東京湾側から浸入する谷津の一つの奥部に張り出す台地上に立地する。近接して谷津遺跡や瓜作遺跡（註4）が所在し、谷津を挟んだ南東側にかつては仁戸名遺跡（註5）が展開していた。

池田古墳群の発掘調査は、昭和56年度に路線内の2,150㎡を対象に実施し、円墳1基のほか、古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住居跡10軒、焼土跡1か所、土坑1基の存在を明らかにした。これら発掘したそれぞれの遺構と、それに伴う遺物については報告書のとおりで、また円墳の盛土のなかから縄文土器の出土があった。

ここに紹介する資料は報告書に実測図を掲げて示した、「12B区調査区付近において集中して一括採集されたものの一部」を補うものである。

古墳の盛土から出土した遺物の概要

「12B区調査区付近」とは、舌状に張り出した標高29m前後の台地の中央部にある円墳(1号墳)の、その南半分が含まれる地区で、採集した遺物は縄文時代の所産になるものが大部分である。その主体は土器片と礫であり、それに少量の石器がある。土器は早期に比定されるものと中期に属するものがあり、後者についてはすでに報告書でふれている。これから記述を進めるのは、早期の土器と、早・中期の石器類である。土器については撚糸文系土器に限られ、破片総数で778点が出土している。ほかの遺物の数量的内訳を示すと、石器類が26点、剥片2点、加工痕や明確な使用痕跡の認められない礫が479点となっている。

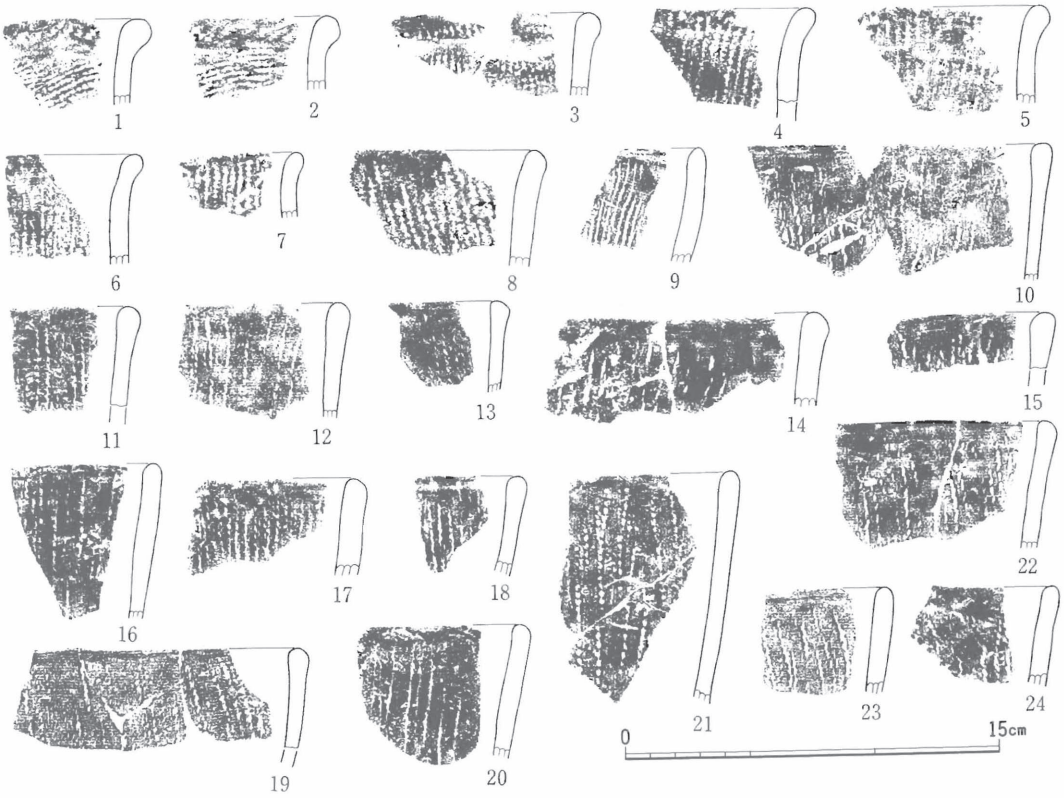
撚糸文系の土器(第1・2図)

第1類(第1図1・2)　口唇部が肥厚外反し、その口唇部上端部から外面と頸部に縄文の施文が認められ、井草I式に比定されるものである。同一個体の口縁部の破片2片のみで、胴部の破片からも個体数は1あるいは2個体とみられる。頸部の器厚は7㎜前後で、内面は横方向に磨きに近いなでが行われている。色調は暗黄褐色である。

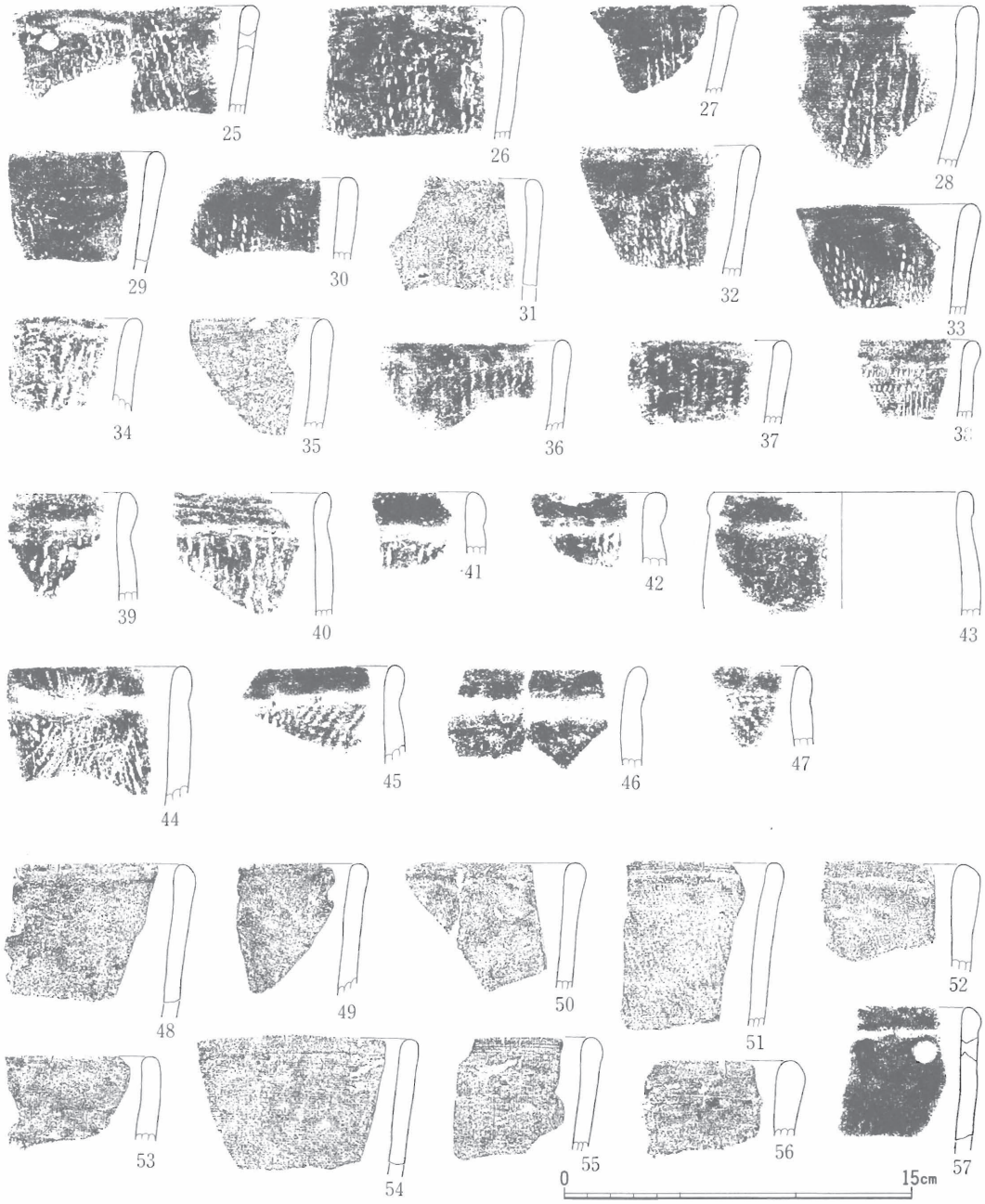
第2類(第1図3～9)　夏島式と考えられるものである。量は少なく、口縁部の破片数は20点に満たない。器形は、頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反し、口唇部がわずかに肥厚して納められるもの(3～7)と、外反の度合いが弱く、口唇部はやや肥厚するものの丸く納められるもの(8)と、外反せずに、若干内彎するように立ち上がりそのまま口唇部を丸く終わらせるもの(9)がある。縄文を施文するものが主であり、口縁部形態がほかと異なる9だけに撚糸文が施されている。縄文の施文は口唇部直下から認められるが、8は上端部にわずかに無施文部分が存在する。

第3類(第1図10～第2図38・48～56)　稲荷台式と考えられるものである。池田古墳群の撚糸文系土器のなかで、数において他類を圧倒して出土している(註6)。胴部上半から口縁部にかけてほぼ直立するような形態をとり、口唇部の断面形態が円頭状を呈するものがほとんどである。また撚糸文(10～34・38)、縄文(35～37)、無文(48～56)が認められる。

撚糸文の施文は第2類のそれと比較すると、明



第1図　土器①(第1～3類)



第2図　土器②（第3～5類）

らかに撚糸の条間隔が広くなり、施文の上端が口唇部から間隔をおいて始められている。そして口唇部や内面は、横方向のなでか丁寧な磨きによって調整され、さらにそのような調整が口縁部の外面に及ぶため、一度施文された文様が磨り消されたような状況になっているものも見うけられる。第2図28～33などは、口縁部に無文部が設けられている観さえある。38は条間隔がやや狭いものの口縁部の下がややくびれており、帯状に無文部がうまれている。撚糸の条間隔が狭いので、断定的にはいえないが、第4類に近い趣がある。

35～37の縄文のものは、乾燥がある程度進んだ段階で施文が行われたためか、粒の圧痕が浅くかなり不鮮明な状態となっている。

48～56の無文の土器は、胴部から口縁部にかけて直立に立ち上がり、口唇部が丸頭状に納められ

ている特徴から考えて稲荷台式に含められる。撚糸文や縄文の施された有文土器の数と比較すれば、半数以下でしかないが、口縁部の破片数は44点出土している。土器組成のなかで、確実にその一翼を形成しているといえるだろう。

撚糸文・縄文・無文の各タイプとも、全体に胎土に砂を含んでいるが焼成の良好なものが多く、色調は褐色を主に橙褐色、黄褐色、赤褐色が存在する。ただ、外面の状態がよく保たれているのに比べ、内面に摩滅したり剝落する部分があるなど、表裏によって器表面の状態に差が生じているものが認められる。また、25には焼成後に穿たれた円孔が1か所残る。

第4類（第2図39～46・57）　稲荷原式に比定されるもので、口縁部の破片が16点出土している。現時点では、千葉市南部の遺跡（本遺跡の周辺）での発見例は少ない。

器形は、やや張りのある胴部の上半部が、わずかながら絞られる形で立ち上がり、口縁部が直立ないしは弱く外傾し、加えてその境に浅いとはいえ凹線が巡り、口縁部と胴部が一層明確に分離され、少しくびれた部分がつくられた形態をとるものが多い（39～43・45）。ほかに、凹線が巡るものの胴部の張りがほとんどなく、直立するものもある（44・57）。いずれも口唇部の断面形は丸く納められるが、膨らんだ形態ではないので、第3類土器の丸頭状とは幾分異なっている。以上のような器形と、口縁部が無文となるところに本類の特徴がある。

39～41は同一個体の口縁部の破片である。口唇部の上端部から15㎜ほど下位に凹線状のくびれが設けられ、口縁部は横方向の磨きによって調整される。凹線から下位の胴部には節の太い撚糸文が施される。42もほぼ同様である。43は器表面が摩滅気味に荒れているため、拓本にうまくあらわれていないが、やはり撚糸文の施文を認めることができる。44には引っ掻いたような条線がついている。これは文様ではなく、二次的な使用の際か、あるいは廃棄後についたものと考えられ、その条線の下に撚糸文の施文の痕跡がみられる。

45・46は胴部に縄文が施されたものである。

57は口縁部の下位に段状の凹線帯が巡り、胴部が無文となるものである。凹線の下位に焼成後に穿たれた孔を有する。

胎土が砂質であるものが多く、焼成は43・45・57を除けばおおむね良好である。色調は褐色、暗黄褐色、黒褐色などである。

第5類（第2図47）　花輪台式に比定されるもので、口縁部の破片は1点のみ出土している。器形における特徴に、第4類と比較して際立った違いはなく、胴部と口縁部の間にくびれがみられる。口縁部は無文となり、くびれの凹線部に一条の縄文原体の押圧文が施される。胴部は縄文の施文が観察される。遺存が少ないため、斜行する縄文が認められるにとどまり、羽状の構成をとるのか否かについては明らかでない。

焼成はやや甘く、器表面にざらつきがある。

石　器（第3～5図）

石斧（第3図1～12・15）　石斧は刃部が磨製となるものと打製のものがあり、前者が11点出土している。

刃部磨製の石斧には、偏平な礫を素材とする、いわゆる礫斧が11点（1～10・15）含まれており注目される。礫斧は、素材となる礫の、その半分以下について研磨が施され刃部がつくられる。刃部の形態は、1～5・10は片刃に近く、6～9が一応両刃であると考えられる。また、刃部が直線的になるものと、丸みをもつものとが存在する。

1は直線的な刃部がつくられる。研磨は刃部作出部分に限り行われ、頭部や側面は礫の自然面を残す。刃部の裏面に剝離があるが、これは加工に伴うのではなく、使用によるものと判断される。完存し、長さ69.5㎜、幅39.8㎜、厚さ17.8㎜。

2も礫の自然面を広く残している。また、刃部の両面に刃こぼれ状の小さな剝離が認められる。長さ76.3㎜、幅44.2㎜、厚さ21.7㎜。

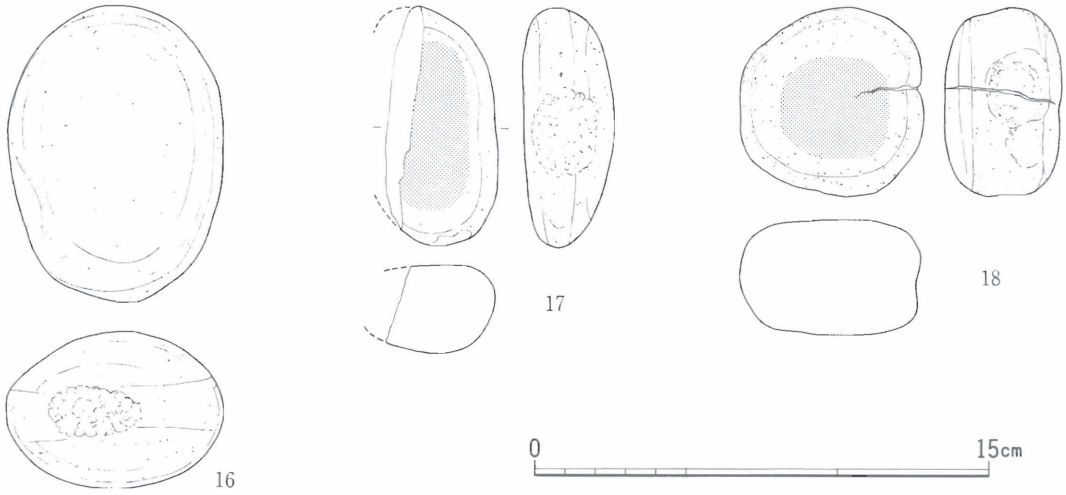
3は縦方向に割れている欠損品である。刃部の研磨範囲が狭く、側面に剝離が加えられている。現状での長さは71.5㎜。

4は頭部に敲打痕跡をとどめる。側面からみると頭部が厚く、刃部に向かって急激に鋭くなっていき、楔の形を思わせる。長さ81.5㎜、幅31.6㎜、最大厚26.5㎜。

5・6・8・9はいずれも欠損品である。6は頭部を欠損するだけであるが、ほかはわずかに刃部を残すにすぎず基部の多くを失っている。

7は両刃で丸刃となる。一部に大きな剝離痕を

第3図　石器①



第４図　石器②

認めるが、積極的な剝離調整は行っていない。刃こぼれもほとんどなく完存する。長さ89.5㎜、幅42.1㎜、基部中央での厚さ29.1㎜。

10は楕円形というよりは細長い礫を素材に用いている。そのような細みの素材の、若干尖り気味となる一端に刃部をつくっているので形は鑿形を呈する。基部側面に剝離痕をもつが、礫の自然面を多く残す。長さ75.1㎜、幅21.1㎜、厚さ13.5㎜。

11は全体の形状が研磨によってつくられ、素材の自然面を残さない。また、基部中位の断面形は整った楕円形に仕上げられている。刃部の一部を欠損する。長さ103.2㎜、幅48.8㎜、厚さ32.8㎜。

12は素材に礫を用いているが、研磨部分は認められず、剝離による刃部作出の打製石斧の部類になる。長さ101.4㎜、幅39.8㎜、厚さ16.0㎜。

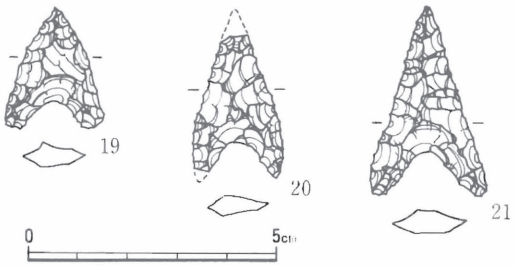
15は偏平な礫の周縁に加工痕が認められる。石斧の欠損品であろう。

礫器（第３図13～15）　13は楕円形を呈する偏平な礫の一端に剝離が加えられ、刃部の作出がうかがわれる。８などから類推すると、刃部磨製礫斧の製作の初期段階とも考えられるが、これで製品の可能性もあるので別に分けて考えておきたい。ただし完成した石器であるとしたら、打製礫斧の部類に含まれるものになるのかもしれない。長さ86.8㎜、幅40.3㎜、厚さ12.0㎜。

14は偏平な礫を素材とする石器で、礫器か石斧の欠損品の可能性が高いが、スタンプ形石器の範疇に含まれるものになるかもしれない。現存部の長さ83.4㎜、幅43.5㎜、厚さ22.3㎜。

磨石類（第４図16～18）　磨石類は一部に敲打痕跡を認めるものを含み、８点出土しており、そのうち遺存状態のよい３点を図示した。18は側面に凹部が存在し、また火熱を受けた形跡がうかがわれる。

石鏃（第５図19～21）　図示した３点がすべてである。それぞれ基部に抉りをもつが、形態は一様でない。



第５図　石器③

礫　加工の痕跡や、磨ったりあるいは敲いたりした痕跡が明らかでない礫が479点出土している。その経緯は不明であるが、火の熱を被ったものが多く存在する。

以上が石器類である。ここに挙げた石器類は早・中の土器と混在した状況で出土しており、帰属する時期もそのどちらかになると考えられる。ただ第４図に示した磨石の類いは、時期決定の明確な根拠に乏しく、その比定が難しい器種の一つである。石斧のうち礫斧は、撚糸文系土器群に特徴的に伴出する石器として知られているので、早期に属すると断定して間違いないだろう。同様に礫器についても早期の蓋然性が高い。第３図11の磨製石斧は中期の所産とみてよいだろう。石鏃は19が

早期と思われ、もう2点は断定は避けたいが、中期のものになろうか。

遺物の特徴と周辺の遺跡

これまで述べてきた池田古墳群から出土した縄文時代の遺物は、県北中央の新東京国際空港建設に伴って調査された、空港内№7遺跡（註7）などとは、比較の対象にならないほど小規模な内容である。しかし注目点もみいだすことができるので、二三取り上げて、まとめにかえることにしたい。また、この機会に周辺に所在する撚糸文系土器出土遺跡の、いくつかを取り上げておこうと思う（第6図に主な遺跡の分布を示した）。

出土した撚糸文土器群には、井草Ⅰ式、夏島式、稲荷台式、稲荷原式、花輪台式が認められ、これにより、撚糸文期をとおし連綿と営まれた遺跡であることが明らかになった。

中心となる時期は、土器の数量から稲荷台式期になるだろう。ここで第3類とした稲荷台式土器には、撚糸文タイプ、縄文タイプ、無文タイプがあり、撚糸文が施されるものが優位を示すが、無文タイプもかなりの割合で含まれている特徴がある。同じように稲荷台式が主体になる辺田山谷遺跡（第6図10　註8）においても、無文土器の比率の高さが指摘されている。確かに無文タイプが、組成のなかに加わる現象は認められるが、その一

第6図　周辺の遺跡分布

1．池田古墳群　2．中野台　3．鷲谷津　4．西花（大森第2）5．新山　6．有吉　7．高沢
8．南二重堀　9．有吉城跡　10．辺田山谷　11．バクチ穴　12．長堀東　13．押沼　14．ナキノ台

方で周辺には高沢遺跡(第6図7　註9)、南二重堀遺跡（第6図8　註10）というような、それが目立った存在とはなっていない遺跡も所在し、遺跡ごとに組成割合はばらついている。

第4類の稲荷原式は、今のところ第6図に示した、東京湾東岸の都川と村田川の中間地域での、顕著な出土遺跡は知られていない。高沢遺跡に少量存在する以外では、都川の北に所在する東寺山石神遺跡（註11）まで範囲を広げなくてはならない。したがって、第5類とした花輪台式との折衷型とされる、縄文施文のタイプと、撚糸文タイプの在り方などは、これからの報告の増加に期待するところが大きい。

次に石器のなかで、特に礫斧についてふれてみたい。本遺跡で注目される点は、出土土器の量と対比して、礫斧の数が卓越していることである。それらが帰属する時期は、礫斧が10点以上出土している南二重堀遺跡の状況から判断して、稲荷台式に伴うと考えられるが、それと比較しても本遺跡は突出した存在である。

原田昌幸氏は、このような該期の礫斧が、主に木工具の役割を担うものと位置づけ、その盛行が「竪穴住居の普及・分布拡大に時間的・地域的に一歩先行した形で認められる」ことから、用途として「竪穴住居の上屋架構が想起されてくる」との見解を提示している(註12)。興味ある意見である。しかし、原田氏指摘のとおり、本遺跡のように竪穴住居が未検出の遺跡においても礫斧の多出があるので、他方面からの検討が必要であることは確かである。当地域では竪穴住居が存在しないのか、存在していたとしても発見しづらいのか、また住様式が竪穴住居とは異なるのか、などの根本的な問題もあるし、木工具としての対象が、竪穴住居の上屋架構以外に主があったら、それが何であったのか、生産活動からの追究の余地もあるだろう。

おわりに

池田古墳群の報告が済んでからすでに6年、補遺を行うにはあまりに時期を逸してしまったと思う。わずかな資料で、この遺跡だけでは新たな検討を要する部分もないが、今後も周辺で増加するであろう撚糸文期の調査の際に、遺跡分布のドットに追加していていただければ幸いである。

なお、池田古墳群から出土したすべての遺物、調査の記録類は、現在、千葉県立房総風土記の丘資料館において保管されている。

註

1．『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅴ　(財)千葉県文化財センター　Ⅰ：1983. Ⅱ：1986. Ⅲ：1989. Ⅳ：1990. Ⅴ：1992.
2．谷　旬　「千葉市大北遺跡の畿内産土師器」『研究連絡誌』第31号　(財)千葉県文化財センター　1991
3．註1の報告書 Ⅱ：1986.に所収
4．註3に同じ
5．『にとな』　本郷高等学校歴史研究部　1972
6．当センターの年報では「夏島式」となっているが、「稲荷台式」が主体である。『千葉県文化財センター年報』№7　(財)千葉県文化財センター　1981
7．『新東京国際空港空港埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ　(財)千葉県文化財センター 1894
8．『千葉市辺田山谷遺跡』　(財)千葉県文化財センター　1986
9．『千葉東南部ニュータウン』17　(財)千葉県文化財センター　1990
10．『千葉東南部ニュータウン』12　(財)千葉県文化財センター　1983
11．『東寺山石神遺跡』　(財)千葉県文化財センター　1977
12．原田昌幸　「木工具としての撚糸文期の〈礫斧〉について」　『竹篦』第5号　北総たけべらの会　1988

参考引用文献

『稲荷原』　大宮市教育委員会　1966
原田昌幸「撚糸文系土器終末期の諸問題(Ⅳ)」『物質文化』54　物質文化研究会　1990
原田昌幸　『撚糸文系土器様式』　考古学ライブラリー61　ニュー・サイエンス社　1991
『千葉県文化財センター年報』　(財)千葉県文化財センター
『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)』　(財)千葉県文化財センター　1986
『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書』　千葉市教育委員会　1991